特集2　牧水の足跡たどる

旅情を歌に
利根沼田の風景詠む

旅とともにお酒や自然をこよなく愛した歌人、若山牧水は、全国を旅し、詩情豊かな多くの歌を残しました。名随筆「みなかみ紀行」の旅から100年。片品渓谷や老神温泉で詠んだ歌とともに、牧水の旅路をたどります。

若山牧水　－わかやまぼくすい－

本名・若山繁。宮崎県に生まれ、早稲田大学文学部英文科に進んだ。1910（明治43）年発刊の第3歌集「別離」で歌人としての地位を築く。短歌の他に随筆、童話、紀行文などを数多く手掛け、9,000首（未発表含む）もの歌を残している。1918（大正7）年と1922（大正11）年の2回、利根沼田を訪れた。

利根沼田の施設や学校を巡回する牧水パネル。利根中学校ではパネルを囲み、傘を背負うポーズで記念撮影

〈1・2〉1985（昭和60）年の生誕100年を記念して老神に建てられた牧水碑（P6写真上も同様）と近辺の牧水橋
〈3〉牧水パネルが利根小学校へ巡回

1922（大正11）年10月21日、吾妻方面を旅していた牧水は、中之条から電車で渋川へ出て、沼田へ入り宿泊しました。翌日から、現在のみなかみ町の法師温泉と湯宿温泉に泊まり、24日、沼田へ戻り宿泊。歌会を開き、牧水はお酒を飲みながら土地の話も楽しんだといいます。

翌25日、老神へ出発。法師温泉で知り合ったK君とともに、片品川沿いを進みました。現在の白沢町岩室付近に出ると、山が深いためやや紅葉は過ぎていたものの、片品渓谷の霞が立ち込んだ落葉の森や、谷の水が流れる渕の浅瀬の眺めに心を奪われたそうです。10を超える歌を手帳に書き付けました。

散りすぎし
紅葉の山にうちつけに
向ふながめの寒けかりけり

老神温泉に着いたのは夜。温泉は宿から少し離れていて、険しい崖の坂道を下った川原の中に湧いていました。底には細かな砂があり、荒瀬の音が疲れた体に打ち響きます。ややぬるめで、柔らかく滑らかな湯だったといいます。湯から上がった牧水は、とろろ汁とヤマメの魚田（ぎょでん）をさかなにお酒を飲みました。

翌26日は朝から激しい雨。K君が買ってきた番傘に2首書き記し、2人は別れました。

かみつけの
とねの郡の老神の
時雨ふる朝を別れゆくなり

相別れわれは東に君は西に
わかれてのちも
飲まむとぞおもふ

吹割の滝を過ぎ、丸沼、菅沼と2日かけて歩いた牧水は、金精峠を越えて上州を後にしました。

紀行の旅から100年を記念し、利根沼田地域では地元有志が顕彰会を設立し、等身大パネルを作成。老神温泉観光協会は昨夏、同会へ加入し、郷土に影響を与えた歌人を知ってもらおうと利根小・中学校にパネルを展示。郷土愛を育み、吹割渓谷や沼田の風物詩を詠む「ふきわれ俳句大会」などへの啓発につなげたいと考えています。宿泊客などへも、老神に建てられた歌碑などを活用して広く発信したいとし、同協会長の萩原忠和さんは「文化的価値を伝え、継承していきたい」と話します。

牧水の歌を詠んだ番傘の形をした銅製の歌碑（上）と番傘（下）。とっくりも添えて酒を愛した牧水を現している。舒林寺（材木町）所有（1985年建立）

牧水が川底から湧き出た湯に漬かったといわれている老神を流れる片品川。当時は川の崖沿いに温泉宿が数軒あったといい、今でも形跡が残っている。紅葉が美しい老神の景勝地でもある